

佐々木ゆのか さん（環境都市・建築デザインコース R5 年 3 月卒）

令和 6 年度 建設産業人材確保・育成推進協議会 作文コンクール

国土交通大臣賞 受賞！



この度、本コースの卒業生佐々木ゆのか さん（現在：穂積建設工業㈱）が令和 6 年度建設産業人材確保・育成推進協議会作文コンクールで、建設産業で働く皆さんからの「私たちの主張」部門で、国土交通大臣賞を受賞しました。全国から 435 の作品がありました。タイトルは「魅力に気がつく瞬間」です。

この度の受賞、誠にありがとうございます。

令和 6 年 11 月

環境都市・建築デザインコース長 南 将人



国土交通大臣賞

魅力に気がつく瞬間

ささき 佐々木 ゆのか [穂積建設工業株式会社 / 青森県]



私は地元八戸の建設会社に就職し、土木工事の現場監督をしている社会人2年目だ。

幼い頃から可愛い服が好きだったため、私服で出社できる仕事に就きたいと考えていた。きらきらした生活と、女性らしい職業に憧れていたのに、なぜ土木工事の現場監督をしているのか。度々家族や友人から不思議に思われ、現場監督っぽくないとよく言われている。この職業を選んだ理由を問われる度に、この仕事のやりがいと楽しさについて考えている。

そんな私が建設業に出会ったのは高校2年生の頃である。学科長の勧めにより、三陸沿岸道路の建設現場の見学に行った。遠足感覚で参加した行事で、初めて重機が動いているところを見た。山を切り開いて道路を作っている様子は壮観だった。翌年に完成した道路を見学した際に、この道路は地元の人の生活を、私の生活を便利にすると思った。感動と同時に、自分は土木工事に関わる仕事に就くかもしれないと思った。しかし、大変な職業というイメージがあったためとても悩んだ。私は重い荷物を持つ力も、暑さ寒さに耐えられる十分な体力も持っていない。女性が働きやすい職業が増えてきた社会で、わざわざ苦勞する道に進まなくていいと学校の先生に言われたが、やりがいを見出せない職業よりは、大変だがやりがいがある職業に就いた方が幸せなはずだと思った。以上がこの職業に就こうと思った経緯である。

若い世代は大半が都会に就職する。私のクラスでも、40人中3人しか地元に残らなかった。そして、地方の企業は従業員の高齢化に伴う人手不足に悩まされていると聞く。建設業も例外ではない。実際に現場にいと、2、30年後が心配になるほどに作業員の年齢層が高いことを実感する。私は地元の建設産業が人手不足により衰退していくのが怖い。

地元の建設業に興味を持つ若者が増えることが活性化に繋がる近道だと思う。しかし、興味がない人に興味を持つよう促すことは難しい。若い世代の大多数は効率重視だ。

少ない苦勞で大きな利益がモットーな世代に、やりがいがある売りである建設産業は受けが悪い。それを理解した上で、それに打ち勝つような楽しさと、地元のインフラを支えることのやりがいがあることを理解してほしいと思う。

私のやりがいは、地元のインフラに携わりながら、地元の人の暮らしがより良いものになっていくのを近くで感じることである。私の1番仲の良い友人が「この橋ができれば、私の家から一直線で出勤できるようになるんだよね。」とよく話している。私は今、その橋につながる道路の建設に携わっている。自分の日々の仕事が、大好きな友人の「便利」に繋がるのがとても嬉しくて、今までで最大のやりがいを感じている。

建設産業は、その地域の「安全」や「生活水準」に直接関わることができる。地元の建設産業に携わることは、身近な人の暮らしに貢献していることをとても近くで実感できるということだ。それは、地元の建設会社に就職したからこそ感じられるやりがいである。生まれてからずっと過ごしてきた八戸の街並みが変わっていく様子を、傍から見てみるだけではなく、変わっていく景観の中に自分が携わった建設物があるという喜びを理解した。だから私はこの仕事を続けたいと思うようになった。

小さい頃に憧れた生活はできていない。周りの人が不思議に思うほど自分に似合っていない職業。不安なことばかりだった。しかし、地元で貢献できる実感を得られた今は、不安よりもやりがいが大きくなった。同時にいくつもの目標ができたため、日々が充実している。

地域に根付いた建設産業だからこそ、味わえるやりがいがある。このことを知った私は、できるだけ長くこの職業に就いていたいと思うようになった。できるだけ多くの若い世代が、地元の建設産業の魅力に気がつくといい。今は似合わない「現場監督」という職業が板につくようになったら、高校生の頃に現場見学会で味わった感動を、多くの若い世代が感じられるよう、私もその魅力を伝える側の一人になりたい。